住民参加型公共施設デザインへのワークショップ手法の課題
―徳島市における２つの事例より―

（株）大林組　正会員　○志摩久仁子
（株）建設材料試験所　正会員　澤田　俊明
徳島大学工学部　正会員　山中　英生

１．はじめに

最近では住民参加が様々なまちづくりの場面で広く取り入れられており、その一つにワークショップ（以下 WS と略記）がある。WS とは、何かをつくり出すための集まりのことをいうが、まちづくりの場面での WS は、一般に住民・行政・専門家の３者から構成されていることが多い。そしてこれら WS 構成者のそれぞれの役割と相互関係のあり方が、WS の良否を決める重要な要素となる。

本研究では、公共施設をつくる“ものづくり WS”を対象として、前に示した住民・行政・専門家の他に設計者の４者から構成される WS を対象として４者の機能や相互関係のあり方の問題点を整理し、改善の方向への検討分析を行う。研究をするにあたって、徳島市末広公園改修計画 WS と徳島市しらさぎ台地区センター建設計画 WS を事例として調査、考察を行う。なお、ここでは住民の参加を直接に得て話し合い作業をする場をリアルタイム・ワークショップ（以下 RWS と略記）と呼ぶ。

２．徳島市末広公園改修計画 WS 事例

末広公園は、徳島市東部臨海地域の市営団地等に囲まれた静かな住宅地に位置する面積約 1,500 m²の街区公園である。昭和 46 年に設置されてから 25 年経過し老朽化が進んだため今回改修されることになり、徳島市の住民参加によるまちづくり施策の一環として、徳島市では初めての WS の導入を試みられることになった。WS 導入時点では公園改修の事業化は未決定であった。

表―1　末広公園 RWS の概要

RWS	日時	参加者（人）	目的
プレ	1995、8/27(日) A.M9:00～	住民大人 52 子供 55 スタッフ 30	末広公園で遊ぼう
第１回	10/8(日) P.M1:30～	住民大人 14 子供 12 スタッフ 36	公園のイメージ作りをしよう
第２回	11/26(日) P.M1:30～	住民大人 15 子供 11 スタッフ 25	公園の起こし絵模型を作ろう
第３回	1996、2/18(日) P.M1:30～	住民大人 18 子供 17 スタッフ 21	使い方シミュレーションをしよう
第４回	10/26(土) P.M1:30～	住民大人　8 子供 12 スタッフ 19	基本計画案から計画課題を検討しよう

今回の WS は、行政が主催、研究組織としての専門家グループが運営や支援しており、住民の参加は誰でも参加できる形態となっている。住民への参加呼びかけは、事前の広報誌配布やポスター掲示、当日のハンドマイク宣伝である。

RWS はイベントによる住民参加 PR をかねたプレ WS を含めて５回行っている。

第１回 RWS は、当日の RWS 非参加者への街頭突撃インタビューおよび参加者の旗揚げアンケートから意見収集をした。さらに、公園のイメージづくりを言葉でつくり、旗揚げアンケートを行った。第２回 RWS では、実際の末広公園の大きさを現地体験した上で「こんな公園にしたい」と題してグループに分かれて、公園の起こし絵模型を作った。第３回 RWS では、前回出来上がった起こし絵模型をまとめた模型が登場し、それを見ながら使い方シミュレーションゲームを行い、要点や悪い点の抽出をした。それらを元に計画案の検討課題の整理を行った。この後公園改修が事業決定され、設計者が決まった。それを受けて、第４回 RWS では、設計者が新たに参加し、第３回 RWS でまとめた計画案を、設計者が模型と図面に表して参加者に提示した。設計者の説明や模型をもとにして参加者は再度設計案についての検討を行った。これらの設計プロセスは順調に進んだが、住民の参加者が一部地元自治会の支援は得たものの基本的に参加者を予め特定しない自由参加形式であったことから、複数の RWS に連続して参加した住民がほとんどなく、公園づくりへの住民の意識の盛り上がりと

いう点では、やや不足の感があった。

3．徳島市しらさぎ台地区センター建設計画 WS 事例

徳島市西部に位置するしらさぎ台は、昭和 48 年丘陵地に開発された面積 83ha の住宅団地で、現在約 1100 戸、3500 人が居住している。団地内には 7 か所の公園、自治会集会所があるが、団地の核的なコミュニティ公共施設は未整備の状態にあったため、団地自治会から徳島市にコミュニティ施設の建設の請願も提出されていた。この結果“街並み・まちづくり支援施設整備事業”の対象として、しらさぎ台地区センター建設が現実のものとなり、WS による実施設計策定が開始された。

WS は、市が発案したが、自治会が主催し、末広公園 WS を運営した時と同じ専門家グループがスタッフとして参加した。住民の参加は、あらかじめ自治会が選定し、同一人物が連続して参加する方法がとられている。この住民の参加者は、自治会・老人クラブ・子供会の母親・主婦といったいずれも集会所を利用している大人が選ばれている。

本 WS では、最初から地区センター建設の事業化が決定されており、設計者も決定していたため、第 1 回 RWS から設計者が参加している。

表―2　しらさぎ台 RWS の概要（参加住民は大人のみ）

RWS	日時	参加者数（人）	目的
プレ	1996、7/6（土） P.M1:00～	住民男 10 女 22	ワークショップを知ろう
第 1 回	7/21（日） P.M1:30～	住民男 6 女 21	敷地視察 計画づくり
第 2 回	8/4（日） P.M1:30～	住民男 7 女 19	使い方を考える （最終合意形成）
第 3 回	1997、1/25（日） P.M1:30～	住民男 5 女 15	住民による自主管理のあり方

第 1 回 RWS では、「月に迷ったゲーム」[1] 参加者のコミュニケーションを図った。次に現地で敷地の大きさを確認し、グループ別センターの計画づくりと題して目標を決め、建物の配置や部屋割り駐車場等の作成を行った。その後グループで発表し旗揚げアンケートにて、住民の意見の確認を行った。第 2 回 RWS では、設計者が前回話し合った内容を元にした模型と図面を提示した。住民はグループに分かれて模型や図面から問題点や改善点を探すための話し合いを行った。最後に住民に対して旗揚げアンケートを行い今回の RWS の確認を行った。ここでは設計者が製作した模型と第 1 回 RWS での目標像とのギャップが議論の中心となった。第 3 回 RWS では、4 グループに分かれて施設利用の方針を決め、2 グループずつ運営者側と利用者側に分かれて利用条件や問題点を整理した。その後、利用者グループが運営者グループに利用に関する質問をして、運営者グループが答えるといったゲームを行った。さらに、「施設が完成したらどんなことがしたいか」という質問をして、いろいろなアイディアを募った。全体として、参加住民の意識の高まりは大きく、設計者や行政との間で WS による多くの問題点を解決していこうとする姿勢が生じた WS であったといえる。

4．考察

本研究では、WS の企画運営にスタッフとして参加しながら WS を観察するとともに、RWS 終了時に参加者に対してアンケートを行うほか、運営者や設計者に対してヒアリング調査を行った。また、専門家グループの WS に関する議論を元に検討分析を行った。

主に問題として、住民の参加形態・行政の WS の受け入れ態勢・専門家の存在・設計者の WS への関わり等が挙げられるが、例えば以下のような点が明らかになった。

住民の参加形態としては、ものづくり WS では住民に連続性を持たせること、あるいは対象となる人の特定をする必要があるということ。また、行政は内部で基本情報や制約条件等の整理をし、WS の場に公開すべきであり、さらに、行政が WS に委ねることの出来る意志決定の範囲をあらかじめ WS の場に明示する必要があるということ。専門家は WS で住民や行政や設計者の中立な立場を堅持し、いかに WS でリーダーシップをとれるかが重要であるということである。

---

1) 「都市計画」NO194、1995／社団法人日本都市計画学会　PP 39-42